

## □ オペラ

## 関根 礼子

この年、最も注目すべきいくつかの公演の中で、大野和士が果たした役割は大きかった。新国立劇場のオペラ芸術監督として次代を拓く企画に複数着手したのに加え、サントリーホールのサマーフェスティバルでもプロデューサー・指揮者として海外の現代オペラを紹介して気を吐いた。

新国立劇場ではまず東京文化会館と共同で《トゥーランドット》を制作し、びわ湖ホールと札幌文化芸術劇場hitaruも巡演。これはオリンピックがらみで実現した企画で、事業規模の大きさと芸術的成果の斬新さで際立っていた。特に演出（アレックス・オリエ）が衝撃的で、今日の視点から作品を深く掘り下げ、トゥーランドット（イレネ・テオリン、ジェニファー・ウィルソン）の人物像に一貫性を持たせて最後に自害させるという意表を突いた結末。演奏面では劇的迫力に富んだバルセロナ交響楽団、国内外のトップ歌手たち、3つの合同合唱団を含めて大野の指揮で覇気のある好演となった。

同劇場のもう1つのヒットは創作委嘱新作《紫苑物語》の初演。指揮（大野）、監修（長木誠司）、台本（佐々木幹郎）、作曲（西村朗）ら複数のスタッフがそれぞれの理念のもとに精魂込めて作り上げた合同作品といった感触で、現在可能な範囲で最高の態勢がとられた公演だった。従来「日本オペラ」の世界を一步躍進させる快作だったことを評価したい。とはいえ作品のテーマ設定には未整理な面が残る、演出（笈田ヨシ）がそれを巧みに救ってはいたものの、今後再演を重ねる中で一層深めていくべき課題ではないか。

新国立劇場ではこのほか新制作の《エウゲニ・オネーギン》でロシアの歴史と伝統色濃厚な舞台（演出：ドミトリー・ペルトマン）で作品理解を促し、《ドン・パスクワレ》では内容重視の演出（ステファノ・ヴィツィオーリ）が抱腹絶倒路線とは少々異なる品格ある喜劇オペラとして好印象を与えた。再演を重ねている《蝶々夫人》で全体的な完成度の高さを示したことも付記しておきたい。

サントリー芸術財団50周年記念として開催されたサマーフェスでの「ザ・プロデューサー・シリーズ：大野和士がひらく」では、いくつかの作品を部分的に紹介する（現代オペラ）クロニクルに続き、ジョージ・ベンジャミンの《リトゥン・オン・スキン》がセミ・ステージ形式で日本初演された。13世紀の男女関係の悲惨な物語を描きながら、権力を振るう者と自由を求める者との相互関係を鋭く突き、しかも希望を捨ててはいない。音楽は美しく演奏も上々。加えて舞台総合美術（針生康）が大変素晴らしく、深く胸に迫るものがあった。世界の現代オペラの最前線が、すでにかなり高度の表現域に達していることが納得できた。

監督として采配を振るった指揮者には他に英国ロイヤル・オペラの音楽監督として《オテロ》と《ファウスト》を指揮し、最高の総合舞台芸術を堪能させたアントニオ・パッパーノがいる。これはこの年のオペラ・シーンの圧巻だった。マリインスキー・オペラは芸術総監督ワレリー・ゲルギエフの指揮で、粒のそろった歌手アンサンブルを武器に《スペードの女王》を心理劇風に、コンサート形式の《マゼッパ》では激しく重厚な悲

劇を聴かせた。

小澤征爾を総監督とするセイジ・オザワ松本フェスティバルでは、《エフゲニー・オネーギン》でサイトウ・キネン・オーケストラの出演する本格的なオペラ公演を4年ぶりに再開。ファビオ・ルイーニ指揮で、世界的な歌手陣が恋の心理劇を表現した。オネーギンの代役として急きょ抜擢された大西宇宙が若手として立派な成果を挙げたことを特筆したい。

びわ湖ホールでは芸術監督沼尻竜典の指揮で《ジークフリート》を上演して「指環」シリーズを継続。出演を重ねている日本人歌手たちが経験を積んで伸びていることを実証した。

また、兵庫県立芸術文化センターでは佐渡裕芸術監督・指揮のもと、バーンスタインのミュージカル《オン・ザ・タウン》を上演。オーディションをロンドンで行い、兵庫で8回、東京で4回の計12回の大ホール公演を開催するなど、大々的な事業規模でオペラの枠にとられない路線をアピールした。

一方、他の国内団体の多くも、それぞれの活動方針のもとに独自の路線を推進した。新しい企画として注目されたものに、藤原歌劇団が文化庁委託事業として行ったベルカントオペラ・フェスティバル・イン・ジャパンがある。3月に第1回としてサヴェーリオ・メルカダント作曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》をセミ・ステージ形式で日本初演。11月には2回目の同フェスティバルでアレサンドロ・スカララッティ作曲《貞節の勝利》を舞台上演。いずれもイタリアのマルティーナ・フランカで開催されているヴァッレ・デイトリア音楽祭との提携で行われ、イタリアから主要スタッフ、キャストが来日して日本側と共演。前者では特に演出（ファビオ・チェレーザ）が優れた創意を發揮し、粋な舞台を楽しませた。研究的姿勢の強い企画だけに、声楽の基礎固めやバロックオペラの普及に最適の催しといえる。

一方、演劇性の濃い現代演出に多数チャレンジしてきた東京二期会は、この年も複数の現代演出を世に問うた。その中で筆者が最も感銘を受けたのは、《蝶々夫人》の宮本亞門演出である。現代演出にしばしば見られるような悲劇性強調路線とは一線を画した温かみのある愛の物語としての再現で、30年後の米国で瀕死の床にあるピンカートン（樋口達哉）が、成人した息子に語る蝶々夫人（森谷真理）との思い出話としての設定だ。オペラの最後で自害した蝶々夫人の耳に届く彼の呼び声は、瀕死のピンカートンが彼女を呼ぶ声に重なり、2人は手を取り合って昇天する。この作品に本来感じられがちな日本蔑視の視点に抵抗感のある日本人の立場からは、特に喜ばれる演出であろう。アンドレア・バッティストーニの活力ある指揮のもと、訓練の行き届いた歌手たちが実力を發揮して見事な公演となった。

地域型で特に光っていたものに、埼玉県和光市のオペラ彩による《ナブッコ》がある。首都圏の歌手と器楽奏者による管弦楽（アンサンブル彩）を起用し、合唱は地域が担う市民オペラ型。ヴィート・クレメンテ指揮、直井研二演出のもと、充実した管弦楽演奏に支えられ、特にナブッコ（須藤慎吾）とアビガイル（小林厚子）の好演が傑出。合唱もアマチュアなりに感動的な歌唱を聴かせ、大変立派な公演となった。

地域発信でもう一つ異彩を放ったのが、静岡で初演された《ある水筒の物語》（台本・演出：高木達、作曲：伊藤康英）だ。静岡大空襲にまつわる実話を基に平和へのメッセージを伝える内容で、地元在住・出身者らを中心にしつつも活動には幅広い視野と発展性があり、今後の活動が期待される。

これらの成果の一方、消費税増税に伴う諸物価の上昇や自然災害・交通機関運休による公演中止などが発生、今後に一層の懸念が持ち越された。